

# もうひとつの“炮台山”

高橋 健男

## 1 難民救済組織と働きの具体は？

方正であれ新京、奉天、ハルビン、チチハルなどの都市部であれ、そこに避難集結した開拓団避難民を主とした難民は、行き着いたそれぞれの地で自分たちの力で住むところを探し、食糧を確保し、収容所生活を始めることができたわけではない。彼らはおしなべて疲労困憊の上に身一つ、無一物に近かった。

そんな彼らは誰かの采配で居住区画を与えられ、身を置く狭い場所をあてがわれ、少しばかりずつでも食糧給与を受けたはずである。手記には「一家6人に畳4枚に満たない場所を与えられ...」、「給食係がバケツに高粱粥をもらいに行き...」、「ソ連軍の使役に」等の表現で何らかの都市部在住日本人らによる組織的救済の動きをうかがわせる。都市部ではまず現住者の保護の目的でその地の日本人会が発足したり、流入してくる避難民のための救済組織が作られたりしていた。では、方正ではどうだったのか？

采配を取り指示を出し、救援のための諸々を担当した人たちがいたはずである。その事務組織や連絡組織ができたはずである。ところが避難民集結地や難民収容所に関する手記類にこの組織的動きの詳細が記されることはない。避難民の立場からすれば、すべてにすぎたって過ごす数ヶ月を経なければ、周りの状況を客観的に見ることはなかった。自分たちが受けた各種連絡は臨時に決めた班長からであったり、開拓民の避難集団にいた年配の男性からであったりしたのであろう。その人たちがどこから連絡や指示を受けているかを知ることとはほとんどなかった。

流入が続く数週間は混沌・混乱状態であったかもしれない。しかし少なくともひとつの避難集団内ではその集団の人員確認や連絡役が必要である。それがいくつかの避難集団間、方正なら方正に集結した避難集団全体で必要となり、曲がりなりにも組織的な動きが生じるのは自然のことである。

吉林市におけるそんな動きの詳細を記した手記がある。その手記は昭和20年8月9日から翌21年10月までの避難集団の動きと救済本部の動きを克明に伝える。1938（昭和13）年、26歳のときに吉林市第二国民高等学校事務長として渡満した三田善右衛門がその人である。三田は1941（昭和16）年10月には協和会に職を転じ、吉林市協和会青年課の責任者となる。市内在住の青年たち（日本人も中国人も）の組織をつくり、各種指導に当たった。

日本敗戦となったとき、まず市内在住日本人の保護に当たる。新京からの避難者、奥地からの開拓民避難者が次々と吉林に流入してくると、同胞の難民救済に当たった。ソ連軍の吉林入城後、ソ連軍撤退後の中共軍、中共軍に入れ替わった中央軍（国府軍）との折衝の日々を過ごし、1946（昭和21）年9月中旬の最後の帰国組までの指示・統制に携わった。

手記は1年余に及ぶ難民救済組織の一部始終を記録する。開拓団や避難民の手記には書き表されない避難集団の様子や救済組織の動きを私たちは知ることができる。

## 2 もうひとつの“炮台山”

三田善右衛門の『光陰赤土に流れて』（三田照子、2000。昭和47年出版のものの復刻）は、吉林市における終戦後の暴動、略奪、連行、立ち退き命令、難民続出、飢餓、疫病、そして次から次へと斃れていった同胞の埋葬等の詳細を後世に伝える。

その中に「砲台山」（注：三田著書では“炮”でなく“砲”）のいう章がある。この「砲台山」はもちろん吉林市の「砲台山」であるが、その記述を見るとまさに方正の「砲台山」がその状態にあったのではないかと思わせられる。ちなみに吉林市郊外には方正地区にあった「砲台山」も「尖山」もあった。吉林市でも方正地区同様その容貌などからこのように命名されていたのであろうか？

その記述から昭和21年解氷のころと推定できるが、そのころの「砲台山」は次のようであった（同書、p. 290-291）。吉林では、方正をはじめ旧満州のどこの難民収容所でも同様のことであったが、越冬中にコレラ、発疹チブス、栄養失調などで毎日何十人かが斃れていき、その数は救済本部にも報告されないままなので不明である。「千人分として掘られた最初の穴が一月ほどでたちまち埋め尽くされた」状態となり、2000人から3000人分の穴がさらに準備された。その遺体収容所の昭和21年春の様子である。

ある日市政府から厳重な抗議がきた。衛生上放置できないから早速墓地の整理をするようにとのことである。驚いて砲台山に駆けつけてみると、なるほどひどい。

麓を中腹までも登らないうちにまず鼻をつく異臭。喰い荒らされた生々しい骨が散乱している。草むらにつまづきそうになって立ち止まると、足下には顔半面を噛み取られた女の首が傷跡にべっとり黒髪をひっつかせて転がっている。この様子では墓地はさぞと急いで行くと、案の定、この世のものとも思われぬ無残な光景であった。

随分と惨たらしいものにも見慣れてきたはずの自分も、思わず背筋を冷たいものが走るのを覚え、目を背ける。掘り返された墓穴の彼方此方から青黒く乾いた手や足が覗いている。周囲には身体のだこともわからない肉と骨とが散乱している。大きな赤黒い塊を恐る恐る覗き込むと、それは喰い荒らされた人間の胴体が僅かに肉片をつけて肋骨だけになっていた。

子牛ほどもある大きな満州犬が喰う物もなく山から山へ、野から里へと群れをなして彷徨している。時としては生きている人間にさえ噛みつくほどにも飢え、野性に選んでいるこの野犬たちが浅く掘られた墓穴くらい掘り返すのは雑作もないことであった。

この様子を目の当たりにした三田善右衛門はその犠牲の惨さに嘆息する（p. 291）。

なんということであろう。この世にこんなことがあってよいものであろうか。生きるということにも死ぬということにもたいした意義を感じられないどん底の窮迫にある日本人ではあったが、この地獄の情景、この冒瀆にすら無感動に成り果てたのか、己の身体をずたずたに晒されたように覚えて恥と怒りと恐れで身体が慄えた。

風もない午過ぎの砲台山には人一人見えず、井戸の底にも似た不気味な静寂は側々として鬼気迫るようである。死に切れない悲しい声が聞こえるように思えた。ここに眠る人々はみなわれわれの同胞なのだ。異郷の地に万俵の怨を呑んで逝った人たちである。失意と絶望のどん底で、祖国への夢も憧れも空しく死ななければならなかった人たち。われわれは力足らずにみすみすそれを救うこともできなかったばかりではなく、葬るに十分の礼さえも尽くせなかった。そのためのこの冒瀆である。

止むを得ない日本人の運命なのだとはこの際思いたくなかった。すべての自分たち、

否、自分の力の足らなさや悔やまれて、せめてものことと一つ一つ立て直していく墓標の木片は無数に無限に思われた。

方正においてはどんな状態であったのだろうか？

方正県人民政府や現地中国人による遺体焼却処理やそこに動員された難民収容所にいた日本人からの聞き取りについては拙著『満州開拓民悲史』（批評社、2008）で知りえるところを記録した。しかしこの処理がなされるまでの何ヶ所かの遺体集積場所での様子などはその全貌をなかなかつかめない。

### 3 遺骨に別れを告げての引揚げ

昭和21年9月18日、三田善右衛門ら最後まで吉林にとどまって日本人遺送や各種処理に当たった救済本部（＝日本人会）人員や傷病で入院していた人たちは、第13次遺送団として吉林を出発した。三田善右衛門らはその前に「砲台山」を再び訪れ、最後のお別れをした（p. 316-317）。

秋風がもう肌に寒い薄曇りのある日、われわれ残留者の全員は砲台山への枯野道を黙々と歩いた。頂上の日本人墓地には数千の同胞が淋しく眠っている。われわれの吉林退去に当たってぜひとも挨拶して行かなければならない人たちだった。

冷たい風が丘のすそから吹き上げて来ては長い枯れ草を分けて去る。広い丘にはわれわれの他には人影も見えず、内地の東北地方を思わせる灰色の空の下に誰もが無言で肩をすくめて歩んだ。寒さの故ばかりではない。

見る限り足の踏み場もないほどに掘り返された盛り土、枯れ草の数ほどに立ち並んだ粗末は墓標、そして時々叢の中に見られる白骨は惻々としてわれわれの心を苛むのだ。倒れかかっている墓標を立て直す者、白骨を拾って丁寧に埋める者、われわれは思い思いに散ってこの気の毒な犠牲者たちに最後の奉仕をした。（中略）

帰国を前に幾千の人が（夫と子供二人をここに埋めた病院の付添婦のKさんと）同じ思いで、同じように砲台山の土を濡らして行ったことか。再び訪れることもない異郷の土に、日本人の去った後はどんなに管理されるかも知らず、肉親、知己を埋めて帰る人の心はどんなものか。あのKさんの悲しい姿こそは、幾千の日本人の姿でもあったのだ。

そして吉林最後の人たちは犠牲者たちを供養する。供養とともにその「非業の犠牲」をもたらしたものに怒りが次のようにこみ上げる（p. 317-318）。

やがてわれわれは墓地の中ほどに立つ「日本人墓地」と書かれた四角な柱の下に集まった。心ばかりの花、線香を捧げ、一行の中の高杉和尚が読経した。高杉和尚の寂びた声が静かな砲台山の秋草に沁みるように流れて、みな頬を濡らして長い祈りを捧げた。ここに眠る方に近い霊こそは天寿を全うしたという人たちではない。手こそ下されなかったが、すべて敗戦の犠牲による「非業の死」なのだ。

悲しみの果て、やがて自分の心の底から突き上げてきたものは、何者へとも知れない激しい怒りであった。無益に死んでいったこの人たちに何の罪があったのだ。つましく生活し、ささやかな日常の幸福に満足していたこの多くの善良な人たちをこのように惨めに殺したものは一体誰なのだ。

戦争が歴史の必然だというのか、そしてこの人たちはそのための止むを得ない犠牲だったというのか。そんな莫迦なことはない。殺し合い、憎み合うことが逃れられない人間の宿命でなぞあるわけがない。

百万言の勇ましい言葉も、上手に組み立てられた理論も、この幾千の屍を前にしては何の意味があろう。あるのはこの目の前の現実、この悲惨な現実を生み出したものの罪悪だ。それがアメリカやソ連の指導者なのか、日本の軍部なのか、それとも社会全体なのか、自分には今よくわからない。しかし罪人は必ずある。何処かで何者かが大きな誤りを犯したことは、何よりもこの目の前の現実から確かなことだ。

灰色の空の下、幾千の屍の上に立って、そのとき人の心はもはや悲しみではない、激しい怒りで燃えていた。思えばこの惨めに死んだ人たちと、生きて今故郷に帰ろうとしているわれわれとの間には、罪において、権利において、何の差別があろうか。贖わねばならない罪があるというなら、同じくあるだろう。生き残るだけの理由と権利があるのなら、この人たちにも同じくあったはず。それなのに一方は生き、一方は死んだ。運命とのみいいものであろうか。

供養しながら犠牲者を悼むとともに生き残った自分たちの使命を心に刻む (p. 318)。

このとき自分は思わずハッとして目の前が開けるような気持ちになった。死んだ人たちを含めて一体としての自分たちの生命、生き残った者に負わされた厳粛な使命感だ。犠牲者に対するわれわれの責任、といってもよい。

そうだ、われわれは理由なく生き残ったのではない。二度と再びこの誤りを繰り返さないために、社会から、国から、民族から、そして自分自身の心の中から、今までの罪人を追い出さなければならない。

その罪人は何であるか今はわからない。しかし必ず見つけ出す。そして再び息を吹き返さぬまでにズタズタにたたきつけねばならない。そのときこそ無益に血を流したり無意味に屍を晒したりすることのない世の中が創られるはずだ。生き残ったわれわれの残る生涯を賭けてその使命はそのことでなければならない。

長い長い供養のあと、立ち去りがたい重い心ではあったが、三田善右衛門らはその場を立ち去った (p. 319)。

高杉和尚の長い読経も終わり、各自一握りずつの線香がさらに捧げられて、やがてわれわれは麓への道を静かに辿った。一人離れて後から歩む自分の目の前には掘り返された赤土がどこまでも続く。吹き上げる野分は肅として頬に寒く、枯れ草ばかりの禿山は荒涼として遥かに尾根を北山の方まで連ねている。ここに眠る幾千の霊も決して安らかではないであろう。仕方がない、この地球上の隅々まで本当の平和が訪れる日までは、あなた方の霊が安まることはないのだから。

長く方正に在った残留婦人たちは犠牲となった同胞に同じ思いを重ねた。方正地区には幸いにも「方正地区日本人公墓」が建つ。吉林のこの数千の犠牲者たちは戦後誰からも省みられることなく、埋もれた地の存在も今となってはわからなくなっているのではないか。新京や奉天の日本人墓地も、戦後慰霊に訪れた人たちがその場所を特定できなかったという慰霊記を見出す。ましてや公園、学校のグラウンド、倉庫脇の空き地、川原の一角といったところが一時の遺体置き場や埋葬地となったところでは、その地に戦後の都市が建設され、犠牲者を弔うことなど不可能となっている地がほとんどであろう。

方正地区日本人公墓、中日友好園林の存在は、吉林でのことを知り得ると、それゆえに特異な慰霊の地であることを改めて認識させられる。